

# A 国 語 問 題

## 注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべて黒鉛筆または黒芯のシャープペンシルで記入することになっています。  
黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。  
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。  
なお、問題番号は一～三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。  
解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷ついたりしないように注意してください。
- 六 この問題冊子は持ち帰ってください。
- 七

### マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のように黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しくずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	
○	1
○	2
●	3
○	4
○	5

(3と解答する場合)

※

大問一・二については著作権の関係により掲載できません。  
引用した文章は次の通りです。

- ・ 大問一 吉本隆明『背景の記憶』
- ・ 大問二 稲盛和夫『生き方』

三 左の文章は、『住吉物語』の一節で、下女の筑前が西の対に住む姫君宛ての恋文をたびたび持参していることを聞きつけた継母が、筑前に聞いたところから始まる。西の対の姫君は既に母を亡くして父の邸に引き取られていて、同じ邸内に継母とその娘の三の君が住んでいる。これを読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

筑前を呼びて、「このほど、西の対<sup>ふか</sup>への通ふは、たれ人ぞ」とのたまへば、とかく言へども、あながちに問はせたまへば、申しけるは、「右大臣殿の御子に四位の少将殿の文を、たびたび参らせさぶらへども、さらに用ゐたまはず」と申せば、これを聞きたまひて、「さやうの君達<sup>きんたち</sup>は、人にいたはれんところおぼしめすらめ。母もなからん人よりも、三の君が大人しくなりたるに、耳寄<sup>注1</sup>りにこそはべれ。よきやうに計<sup>はか</sup>らひたまへ。みづからも世にあらん限りは、何につけてもとぼしきことはさぶらはじ」と、ねんごろに仰<sup>おほ</sup>せらるれば、さすがにいなみがたくて、「たびたび申しさぶらへども、さらに御返事もさぶらはねば、少将殿はわらはをのみ責めさせたまふも、心憂くはべる。さりとて、申しかなへんこと、いとかたし。さらば、さも御計<sup>あ</sup>らひさぶらへかし」と言へば、喜びて、白き桂<sup>うちきひとかさね</sup>一襲<sup>(注2)</sup>、「三の君の」とて賜<sup>た</sup>びぬれば、「さて、少将殿には、もとの御心ざしの御方<sup>(イ)</sup>とこそ申しはべらめ」と申せば、「よくのたまひたり。そのよしを」とて、支度<sup>(注3)</sup>しつつ少将殿に参り、「なほ文をたまはりて、持ちて参りて見はべらん」と申せば、喜びたまひて、

A よとともに煙絶<sup>けふり</sup>えせぬ富士<sup>ふじ</sup>の嶺<sup>ね</sup>の下の思ひやわが身なるらんと書きてたまへるを持ちて、「少将殿の文」とて、継母御前<sup>ごぜん</sup>にたてまつれば、うち笑みて、「あはれ、うつくしく書きたまへるものかな」とて、「御返事<sup>ごへんじ</sup>疾<sup>と</sup>く」と聞こえたまへば、姫君<sup>ひめぎみ</sup>、たばかりとは知らずして、まことと思ひて、うちそばみておはしますさま、これも目やすくこそ見えはべれ。硯<sup>すずり</sup>、料紙<sup>れうし</sup>取り寄せて、「それぞれ」のたまへば、

B 富士の嶺の煙と聞けば頼まれずうはの空にや立ち昇らん

と書いて、引き結びたるを、筑前取りて、少将殿に参らせさぶらひけり。

急ぎ見たまふに、手なども、いまだ幼びて書きたると思ふも、ことわりに思ひつつ、わりなくこそと喜びて、さまざまにたばかりすることも知りたまはず通ひはべる。

(注) 1 耳寄りにこそはべれ——良い縁談話ですね。

2 三の君の——三の君からのお礼の品です。三の君はこの事情を知らされていないが、継母が三の君に代わってお礼の品を贈っている。

3 支度しつつ——筑前は打ち合わせを何度もして。

## 問

(A) ——線部(1)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 少将殿は決してあきらめなさいません。

2 姫君は少しも恥ずかしがりません。

3 どなたも受け取ってくださいません。

4 少将殿は聞く耳をお持ちになりません。

5 姫君は全くお返事をくさいません。

(B) ——線部(2)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 女性から愛されたいと思っていらつしやるのでしょうか。

2 傷ついた心身を妻に癒<sup>い</sup>してもらいたいとお考えなのでしょうか。

3 妻の実母に結婚を許可してもらいたいと考えていらつしやるのでしょうか。

4 妻とその母に看病してもらいたいというご意向なのでしょうか。

5 妻側の家から経済的な援助を受けたいとお思いなのでしょう。

(C) ——— 線部(3)について。このように頼まれた後、筑前はどうか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 西の対の姫君が返事を書くように勧めた。

2 西の対の姫君と少将殿を結びつけるように励んだ。

3 少将殿と三の君を結婚させるように取り計らった。

4 少将殿と結婚するように三の君を説得した。

5 三の君と結婚するように少将殿を焚き付けた。

(D) ——— 線部(4)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 貧乏になることは避けたいです。

2 この家が貧乏になることはないでしょう。

3 ますます財産は増えていくでしょう。

4 不自由なく暮らせるでしょう。

5 少将殿の財力に劣ることはないでしょう。

(E) ~~~~~ 線部(ア)～(ウ)は、それぞれ誰を指しているか。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 西の対の姫君    2 三の君    3 継母    4 筑前    5 少将殿

(F) ——— 線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 少将殿と西の対の姫君を結びつけること

2 少将殿と三の君を結びつけること

3 少将殿にあきらめてもらうこと

4 少将殿に嘘をつき通すこと

5 筑前の希望を成就させること

(G) 線部(a)～(c)はそれぞれ誰に対する敬意を表しているか。最も適当なものを、次のうちから一つずつ選び、番号で答えよ。ただし、同じ番号を何度用いてもよい。

1 西の対の姫君    2 三の君    3 継母    4 筑前    5 少将殿

(H) Aの和歌の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「よとともに煙絶えせぬ富士の」が序詞となっている。

2 「富士の嶺の」は「下」を導き出す枕詞となっている。

3 「嶺」には「音」が掛けられている。

4 「思ひ」の「ひ」に「火」を掛けている。

5 「煙」「富士」「身」が縁語となっている。

(I) 線部(6)について。姫君はどう思ったのか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 少将殿が自分に恋をしているという噂は本当だったのだ。

2 少将殿が自分に恋い焦がれて恋文を贈ってきたのだ。

3 筑前が自分と少将殿を結びつけようとしている。

4 母が自分と少将殿を結びつけようとしている。

5 少将殿の和歌には嘘偽りのない真心が込められている。

(J) Bの和歌の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 絶えることのない富士山の煙に喩えられたあなたのお心だから、信じずにはいられません。

2 いくらお志が高くても、富士山の煙よりも高く立ち昇ることはないでしょう。

3 あなたのお心は浮ついたものなのでしょう。あてにできません。

4 あなたのお心が富士山の煙のように立ち昇ってしまうと、皆に知られて困ります。

5 ずいぶん高望みをなさっているんですね。受け入れられません。

(K) ——— 線部(7)の現代語訳を三字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(L) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 筑前は継母から少し尋ねられただけで、いとも簡単に事情をしゃべった。

ロ 継母は、西の対の姫君と少将殿を結びつけようとして、あれこれ計画を練った。

ハ 継母は、自分の思うように筑前が動いてくれそうなので、嬉しくなつて物を与えた。

ニ 少将殿は、継母の計画を見破って、うまく立ち回って自分の志を貫いた。

ホ 少将殿は、継母の意向に従ったほうが得策と思い、知らないふりをして文通した。

【以下余白】